国際看護実習がもたらす異文化理解（サモア）

長野県看護大学基礎看護学講座
国際看護学　准教授宮越幸代

サモアの学生と共同で行う国際看護実習

新看護教育課程に設けられた「看護の統合と実践」分野は、国際的な広い視野に基づき、看護師として諸外国との協力ができるような看護師を養成することを目指すとされている。本学では、2004年よりサモア国立大学（NUS）看護健康科学部との国際看護実習が行われており、本学とNUSの学生が隔年ごとに双方の国を訪れ、学生同士が協同で対象を受け持つ。2011年度は留学生を受け入れる年にあたり、合計6名による国際看護実習が実現した。

予告なしのファファフィネ留学生の来学

通産８回目となるこの実習では、毎回、思いがけない学びがもたらされる。例年、受け入れの年はNUSから男女各１名が派遣される。今回派遣された男子学生のMさんは、きれいにメークアップし、小花のイヤリングに赤い鼻緒のサンダルで現れ、宿舎では女子学生のＩさんとの同室を希望した。ユニフォームはもちろん、正装も優雅なスカート姿で、サモアン・ダンスの披露では、本学の実習生のメークをすすんで担当してくれた。もちろん、NUSからそのような事前の情報提供はない。彼のような女性的な風貌や役割で生きる「ファファフィネ」（サモア語で「女性のような」という意味）は、サモアではごく当たり前に受け入れられた存在なのだ。

サモアにおけるファファフィネの活躍

実は昨年度、サモアの地方病院で行った実習でも、素敵なファファフィネ・ナースにたいへんお世話になった。フロアを埋めつくす来診者への対応のために、スタッフを的確に指示し、住民の相談には親身に接していた。初めて訪れるサモアの村落で、伝統的なマナーを熟知していなかった私たちをさりげなくカバーしてくれたり、実習後は宿舎に突然現れて歌ったり踊ったりもしてくれた。気がつくと、健康管理事務所の管理職ナース、家事を頼もしくこなす住民、タクシーのオペレーター、ホテルのフロント……とあちこちで、繊細かつ働き者のファファフィネがサモアの社会を支えていた。

留学生に教えられる日本の異文化

実習が始まると、Ｍさんへの視線を意識せざるを得ない場面が多々あり、私たちはMさんがそのような視線をどう感じるかが気がかりでもあった。しかし、留学生は実習生同士の意見交換を積極的にリードし、とくにMさんはパソコンを駆使して着々と発表の準備を進めていった。自由時間には、ライフスタイルや嗜好をためらうことなく語り、日本のおしゃれにも強い関心を示した。私たちはそんなオープンな人柄に自然にひきこまれていくと同時に、自分たちが普段、いかに性別を見かけで判断したり、定型的にとらえてきたかを強く意識する機会を得た。サモア人にとっては、そんなステレオタイプこそが異文化であろう。めいっぱい学ぶと同時に、学生らしい娯楽なども堪能し、２人は無事に帰国した。

2012年度は再びサモアでの実習が予定されている。ファファフィネがその魅力を最大限に発揮するサモアで、日本の学生は何を学ぶだろうか。

意見交換でも自由闊達なサモアの留学生